

## 「明德記」の位置(法政大学国文学会創立40周年記念特集)

著者	杉本 圭三郎
雑誌名	日本文學誌要
巻	16
ページ	40-51
発行年	1966-11-26
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/00019165">http://hdl.handle.net/10114/00019165</a>

# 「明德記」の位置

杉本圭三郎

## 一

「明德記」が、軍記物語の歴史的展開のなかでしめる位置を検討するのが本稿の課題である。

「将門記」を先駆とし、「平家物語」において完成の姿をしめし、「太平記」にいたって質的に転換した軍記物語の系譜は、歴史の大動脈ともいべき中世変革の事件そのものを形象したものと、中世文学史を縦に貫く山脈を形成している。これらは個々の作品においても数多くの異本群を擁し、異本間の異同のなかにも享受と創造の歴史が刻みこまれているのであるが、その面の微視的な検討とともに、大きく軍記物語の総体を巨視的に把握することが必要であろう。

中世史の新しい状況とともに、軍記物語の世界も変貌をとげてきた。貴族的なものとの交錯のなかに新興武士の気魄にみちた行動を点綴し、心情に訴えかける浄土教的な仏教思潮を底流として構想されている平家物語から、儒教的な道義批判を全面にたて、治乱興亡、変転きわまりない複雑な事件の進行を漢文訓読風の硬い文体で

追求していった太平記への変化は、その最たるものである。

紆余曲折を経て発展する中世社会は、政治体制の推移によっていくつかの段階を劃すとともに中央、地方をとわず武家の支配秩序は旧貴族の領域をますます侵蝕していった。それは当然思想の次元にも変動をおよぼし、文学史上の新しい動向をうながす要因となっている。中世の支配階級として権力を掌握した武家の間の対立葛藤を叙述する太平記以後の軍配には、既に貴族の心情の介在する余地はない。抒情性をしめだし、殺伐でドライな文体が、叙述の基調をなすに至るのである。

文体上の、和漢混淆文からより漢文脈の支配的なスタイルへの変化は、単に形式上のものであるばかりでなく、貴族的な美感との混淆のなかで行動的な武人像が描きだされる内容の必然的な表現としての和漢混淆文であり、貴族的な要素の後退とともに和文的な面が稀薄になっていったものとみられる。さらにまた、これは享受形態の変化にも照応する。伴奏楽器を必要とする音楽性をもった琵琶法師の語りから、物語僧の「読み」あるいは談義への移行も、作品の世界の変化の、おのずからの要請であろう。これは、ら平家物語か

ら太平記への軍記の展開にみられる特徴的な現象であるが、太平記以後、徳川幕藩体制の成立にいたる過程におこった大小無数の武力衝突を記述した合戦記の類は、どのような性格と機能をもったものであるうか。これらは文学としての評価に堪え得るものであるか、どうか。また、この間に質的な変遷があるのかどうか。

守護大名から戦国大名への成長、さらに、全国的な制覇をめざす群雄割拠の戦国時代、絶えまなく続く戦闘は、この時代の大きな歴史の動向であり、これらの抗争は文学の題材としても不適當であるとは思われない。しかし、文学史のなかに一定の地位をもつにたる作品は、殆んど生まれなかった。合戦記の書かれる動機が、大方は文学的平受を予想していないということもその理由のひとつになるであろう。室町末期から戦国時代を通しての合戦記群は、軍記物語の展開の一環のなかで、新たな検討が加えられなければならない。

ここでは、まず以上の見とおしの上になって、「明德記」の文学的性格を考察し、軍記の系列のなかでの特殊な意義を認めうるかどうかを追究してみたい。

## 二

太平記は、「中夏無為之代ニ成テ、目出度カリシ事共也」と記して、足利義詮が病のために政務を義満に譲り、やがて死去して、細川右馬頭頼之が執事職を司ることを叙した一三六七年の記事を最後に擱筆している。しかしながら、戦乱はここで終止符がうたれていくわけではない。中夏無為の代どころか、東に西に、南に北に、干才を交えない年はない。一三六八年には新田義宗、義治が越後に兵を挙げ、翌六九年には義満に降った楠木正儀が南朝側の軍に攻めら

れている。七十年には新田氏の将馬淵らが上杉朝房、畠山基国と武蔵で戦い、七十一年には桃井直常が越中で斯波義将と戦っている。九州では菊池の一族の軍事行動がつづき、一三七九年になると細川頼之が管領職を罷免され、さらに追討されるという事態がおこる。

このほか、橋本正督、小山義政、赤松氏則、新田義則らの挙兵があいつぎ、一三九一年（明德二年）にいたって、「明德記」に叙述される、いわゆる明德の乱の勃発となるわけである。山名氏は十一国の守護職をもち六分一衆とよばれた有力大名であり、戦いも京都を中心に展開し、わずか一日で終決したとはいえ、激しい戦闘がくりひろげられ、地方で継起していた反乱とはその規模を異にするものであった。もともとこの乱は、山名一族の勢力を削ぐとする幕府の守護大名の成長を抑圧し削減しようという政策がひきおこしたものである。一三九九年この乱においても戦功のあった大内義弘が討伐される応永の乱とともに、乱平定後、室町幕府の権力は一層強化され政局も一時的ではあるが安定する新しい段階にすすむこととなるのである。

明德の乱、応永の乱はこの意味でひとつの劃期をなす事件であった。看聞御記、永享六年二月九日の条に「内裏依仰明德記三帖。堺記一帖進之」と記されていることは既によく知られているが、この両乱の記録が同時に進上されていることは、同じ性格の乱として回顧されていることのあらわれであろう。

作品の検討に入る前に、まず、歴史的事件としての乱の経過を一瞥しておきたい。

時氏以来、十一国の守護を兼ねて権勢を誇ってきた山名氏は、足利幕府にとって大きな脅威であった。義満はこの勢力を抑えるため

一三九〇年、山名一族間の内訌に乗じて、但馬に山名時熙を氏清・満幸らに命じて討たせた。ところがやがてこれを赦したので、氏清らは、義満の追討がわが身に及ぶかと疑い、叛旗をひるがえして、一三九一年（明德二年）十二月、義満側の軍と京都を舞台に激しく戦ったが、敗北した。一三九二年義満は大内義弘を紀伊に派遣して山名義理を討伐し、一三九五年にいたって潜行していた山名満幸が京都で誅せられ、ここに、この乱が終結することとなる。

「明德記」はこの事件の経緯を、挿話をおりこみながら叙述した作品である。

### 三

「明德記」は上中下の三巻にまとめられており、上中において戦鬭の経過が叙述され、下では乱後の事態や乱の余波としての挿話が語られている。上中下はそれぞれ、第一第二第三と記され、第一の応永三年五月日の日付のある奥書には「為末代記録」と作者自ら記しているが、明らかに聴衆を予想した語りものの文体で綴られている。

まず、乱の原因として、山名時熙、氏之らの「武恩に誇て、毎年上意を忽緒」するとか、「京都の御成敗にも随はず、雅意にまかせて振舞う」という、幕府に対抗する動きをあげ、その追討に同じ山名一族の氏清らを任ずるところから「明德記」の叙述がはじまる。

作者は岩波文庫本の解題で富倉徳次郎氏が述べているように、「足利義満近侍の者の一人」と考えられ、もっぱら幕府の側にたった視点からの叙述ですめられている。義満の策略は山名一族の勢力を削減する目的で行われているものであって、作者も「討手の事は

思食子細有けるにや、態と一家の人々をぞ下されける」と、幕府の策謀を推しはかりながら、いささかも批判めいた記述はみられない。氏清は「一家の者共退治の事、偏に当家衰微の基也」と義満の方針を難じながらも結局「上意として仰下さるる上は辞申に所なし。いそぎ馳下て治罰仕候べし」と命を受ける。その際、氏清は、窮地に陥った時熙らが降服を申し出たとき許容するのであったら、氏清が下向する前に教訓して帰順させるべきである。どのように懇請しようとも決してそれを認めないなら直ちに下向して討伐しようとし出て「彼等上意に背に依て、已に退治せらるる上は、誰人について歎申とも、更に御許容あるべからず」という確約を得て、追討にむかうのである。ところが、敗北したのちひそかに上洛した時熙らは「先非を悔て」義満の許容を乞い、たまたま氏清の宇治の紅葉狩の招きをうけていた義満はその折時熙の訴えについて氏清にはかる所存で返事を延していた。明日は宇治に入ろうという前夜半、山名満幸は氏清のもとに馳せ下り、義満に時熙らを許そうとする意向がある由を告げ、氏清もその疑を容れて「内々上意を伺申子細のあればこそ已に上洛はしつらめ。一往の御尋にもあづからず、加様の御沙汰に及事も、只我等を員外におぼしめさるるに依て也」と憤って、宇治への参会を病氣と偽ってとりやめてしまった。

もともと義満の側に前言を断固として履行しなかったという非があるにもかかわらず、その点の批判は全く欠いて、逆に都に帰る義満を「無興至極」の還御と記し、唐突にも美文調の道行で飾っているのである。語りものにおける道行は落魄流離の境涯にある人物の心情と協和して独自の効果をあげるものであるが、ここでは義満の心情とかかわりなく美辞麗句を綴りあわせているだけである。

こうして乱の原因は山名側にあるとして、満幸の出雲国横田庄の仙洞御領押妨の一件をあげ、義満は「縦凡人の所領なりとも下知を違背する事は緩急の至也。いはんや仙洞の御領たるをや」と怒って守護職改替の沙汰となる。これを無念のことと思っていた満幸は時熙赦免の一件が起ったので「一合戦せんずる物と思立」つのであるが、作者は「浅猿けれ」とこれを難じている。満幸は氏清に謀反をすすめ、「事に触てこの一家を滅さるべき御結構」といつて時熙赦免の上は逆にこちらが追討の対象となる危険を指摘し、「一族悉同心して分国の勢をあはせ、方々より参上候はば、今程たれか在京の大名の中に当方に対揚の合戦仕べき仁の候」と自信のほどを示すとともに「先都をだにも責落して候はば、他家の一族も大略は同心仕候べし」といい「近国に又南朝被官の輩数をしらず候。彼等は眉を開て最前に同心仕べし」との状勢の見とおしを述べる。氏清も「天下の望は元来心にかけ」ていたので「一往の思案にも及ばず、やがて領状」して、作戦をたてるということになる。

明徳記の叙述によれば、時熙らの赦免決定は氏清、満幸が謀反にふみきった後の処置であつて、かれらが「身上の事なげき申さん為に上洛したんなるを、御免有て召上せたる」ものと憶測し、反幕府の行動を氏清にすすめた満幸に非があることになる。「更に御許容あるべからず」の断言が「彼二人が歎申分をも内々仰合らるべき御所存」に後退したことへの非難はみられず、結果としての赦免を合理化して「彼等御免の事延引せば『氏清満幸の腹立にささへられてゆるさぬ』など云口遊もあるべし。然ば彼等弥過分に成て、向後の不儀断絶すべからず。いそぎ兩人を御免有て、本知行の国々をかへし付らるべし」という処置が講ぜられることになる。

以上が、この乱の発端の部分であり、幕府権力と守護大名の勢力の対立という、この時代の動乱の特徴を、幕府の側からではあるがよく衝いた叙述であると思われる。

#### 四

この事件に対処する義満側の態度は「家僕の過分を誡らるる御退治」であり、謀反の徒を断罪して「向後傍輩の不儀をこら」そうとするものであった。はじめに明徳二年十月十五日の大地震を陰陽頭土御門有世が占い「世に逆臣いである国務を望む」乱兆ととらえた設定に照応して、「方々の逆徒散々に成て」「天下の大儀一日に落居」すると山名方の壊滅を叙し、室町幕府の体制のもとに「一天泰平に帰」すことが、作者の希求するところであったことを物語っている。

山名の陣営内部にあつても氏清・満幸のこのたびの挙兵に対しては批判があつたとされ、まず氏清がその兄にあたる義理に同心を説いたとき、「上へむけ申て弓を引べき事、返々無勿躰候」と諫めて「我等までも謀反与同の名を取て滅む事更々踵を廻すべからず」と拒み、思いとどまるよう勧告する。しかし氏清の説得によって同意し「ただ一命を面々に進せ」と約して、ともに起つこととなる。

山名氏の側にあつて華々しく戦い討死した武将小林義繁も、氏清に諫言する。「御一家の間に十余国の守護職を御拝領のみならず、諸国の御領ども共数をしらず。是等はただ上意の忝至也」と幕府の恩顧をあげ、「神は非礼をうけずと申候へば、御加護あるべしとも存候はず。」といつてこの謀反を批判するとともに、既に避けられない状況におかれた以上「一番に討死を仕て泉下に忠儀をあらはすべ

きに「候」と覚悟のほどを訴えるのである。

武家権力がゆるぎない支配を維持するためには武力の面での制圧とともに思想上の忠誠を最高の道義とする精神的な秩序が確立されなければならず、ことに下剋上の風潮がきざしはじめる時代においては一段とこの道義が喧伝されることになる。明德記の作者もまた室町幕府のイデオログとして、幕府の体制を至上のものとする立場を基本としてこの乱を叙述しているのである。

しかし、批判はただ幕府への反抗という一点にむけられているだけではなく、ここに中心をおきながらも、武士の理想像を基準とした賞讃、批難が諸人物のさまざまな行動を対象として行われている。もっとも、これらは明德記に新しくみられる批判ではなく、既に従来の諸軍記、ことに太平記などにくりかえし主張されてきた武士としてのモラルにてらしての論評である。

氏清の謀叛に対する作者自身の批判は、「何事の不足さに此謀叛を思立らんと申に、貧にしてへつらはざるはあれども、富て驕ざるはなきに依て也。縦へば分国の寺社、本所領を押領し、寺官、社人を殺害し、商家、民屋を追補し、事に触て悪事をのみ振舞給しか共、守護は公方の御代官なれば、上様へ恐て欺人もなかりしを、我権勢に憚て、世の人の懼ぞと心得て、今度の大逆を企られし心の程こそ短慮なれ」というのであって、権勢に誇り驕りをきわめるといふ人格上の欠陥を指弾するわけである。そこには守護大名層の動向としてみる歴史的な視点はみられない。

主従、父子関係の道義は陣營のいずれを問わず、最も深い関心がしめされていて、「家僕たる物」で「戦場にて主と同等討死する」もの、「主の討死する所をみすててにぐる」もの、あるいは父子とも

に戦いながら「目の前に父の討るを見すてて」落のびる「不覚」人、などそれぞれの状況のなかでの士卒の振舞が、称賛され、あるいは批難され、事件の進行の叙述のなかに綴りこまれている。美とするものは果敢な行動性であり、「義」のためには生をかえりみない武士的な意志の実践である。醜として嘲笑し侮蔑するのは、生に執着する未練がましい行動である。具体的な状況のなかで行動する人間タイプの多様性を、それぞれの個性的なありようでとらえ、描いてゆくことは、類型的な叙述の方法ですすめられる作品には期待できないことである。従って、大方の人物は単純なふたつの基準からの褒貶で処理されてしまう。その内面の情熱や苦悩まで形象されて、ふかく印象にのこる人間像をみいだすことはできない。附随的な挿話のなかには、密度のある人間形象をともなう場面の二三が描かれているが、これは後にとりあげることにしたい。

## 五

明德の乱の戦闘は明德二年十二月三十日、京都を戦場としてくりひろげられた。保元、平治の乱とおなじく京都を舞台として一日で勝負が決するのであるが、戦いの規模は比較にならぬ大きさであり、しかも両軍いりみだれてのすさまじい白兵戦であったところに特徴がある。ここでは、明德記の中心をなしている合戦の叙述を検討してみたい。

両軍の衝突は二段階にわかれ、氏清の率いる軍兵と幕府の軍との交戦を「二条大宮の一番の軍」と称して、その経過を乱の起因について、上巻に叙述し、中巻ではもっぱら満幸の軍と幕府方との戦闘が「内野口西の手の二度目の軍」として展開する。この合戦譚は、

克明な記述のためにかえって迫力を喪う部分をふくみながらも、全体としては、合戦の評定から布陣、軍の動靜、などを両軍を俯瞰して叙述し、戦の開始から終決まで、立体的に語られてゆく。

細部の叙述には、屢、平家物語の模倣ともみられるような表現がみいだされる。たとえば、氏清方の山名上総介高義、小林上野守義繁の陣を、五百余騎の兵を率いて攻撃する大内義弘が、「楯を一面につきならべ、射手の兵二百余人左右の手崎にすませて」

中を破らるな。敵若馬にて破てとをらんとせば、馬を切てはねさせよ。落ば押へて差ころせ。若又敵もおり立て、切てからば閑りて、手もとへちかづけ。組討にせよ。敵は引とも追べからず。手いたく切てかかるとも、一足も退くな。

と、大音を揚て下知し」ながら、真前にすすんでゆく、という、この下知は、平家物語卷四橋合戦での足利又太郎の渡河の際の下知のリズミカルな表現と通じあう。

さはがしかりし年くれて、明德も三年に成にけりという年月の推移についての感慨は、「浅ましかりつる年も暮れ、治承も五年に成にけり」とむすぶ平家巻五の巻末の一句を想起させる。平家物語は軍記物語の軌範として作者の内部に生きていたのであろう。

敵も味方も見物する一騎討の格闘はみられず、戦いは集団と集団の激しい衝突、揉みあいとして展開する。凄惨な白兵戦である。

ひた甲五六百が程をり立て、南向に楯を一面につきならべ、其ひまひまには兵共、枯野になびく尾ばなの如く、切さきをそろゑてしづまり返てひかえ磔たり

内野の方を見わたせば、陣々の大勢打立て、大旗小旗ゆらめ

きわたり、五六万騎も有らんと、雲霞のごとく磔たれば、云々と両軍の対峙を描き、死闘がくりひろげられた後の状況を、二条大宮の戦では

敵御方のわきもみえず、二三百人死かさなて、血は路徑の草をそめ、尸は原上の墓をなす

と述べ、二条猪熊での赤松義則の軍と山名氏家、氏清の勢の戦いも、同じ様に、

息をつかせず揉ければ、人馬弥が上に死重て、血は涿鹿の川と成て紅波楯をながし、尸は屠所の肉をつんで、白刃骨を碎くと叙している。平家物語の浪漫的な合戦譚ではみられなかった殺伐な光景である。既に太平記の叙述した大小無数の戦闘においてこの傾向は顕著となっており、戦いの残忍性を現実の次元で追求する姿勢が、浪漫的美化をしりぞけて前面にできているわけである。武士社会の葛藤が直接、作者をとりまく環境であり、時をへだてた過去の事件を回顧して物語るのではなく、同時代のきびしい相剋を、その内にある追求しようとする眼が確認した非情な戦いの実相であった。明德記の合戦叙述の基調もここにあるといえよう。

二条大宮の戦は「卯の剋に軍はじまて、巳の終まで」、内野口西の手の合戦は「卯剋に始て午剋まで」と、時間の推移をたどり、状況を遠望したり、個人に焦点をあてて近接したりする変化をみせて叙述はすすむ

大宮の合戦、御方打負ぬと覚て、時の声南へ靡分て、次第に幽に成行ければ云々

と、遠近法的な描写もあって、合戦譚に現実性を附与している。

## 六

明徳記にあらわれる人名は、およそ百九十名ほどであるが、単に名があげられるだけでなく、戦場においての活躍が具体的に描かれるか、何らかの言動の記されているのは、足利義満方では、「御所様」とよばれる義満をはじめ、細河武蔵入道常久・大内左京権大夫義弘・一色左京大夫詮範・一色右馬頭満範・赤松上総介義則らである。山名方では、山名陸奥前司氏清とその配下の山名上総介高義・小林上野守義繁・蓮池美濃守、山名播磨守満幸および麾下の（土屋党）大葦次郎左衛門尉宗信・大葦平次右衛門尉・上の卿入道とその子塩冶駿河守、山名修理大夫義理とその舎弟草山駿河守などである。また、最初義満に対抗し、後帰順して氏清らに敵対した山名宮内少輔時熙とその部下垣屋弾正忠、滑良兵庫助、さらに、氏清らとともに行動し、後義満に降った山名中務大輔氏家、といった人々である。

挿話的に語られる人物の行動では、上原入道、山名奥州子息宮田左馬助晴清、同次男七郎満氏・山名小次郎氏義とその母、家喜九郎景政ならびにその母、女房、武田下条・塩治信濃守、熊来左近将監・高田兵庫允・高田民部丞、山名氏清の御台、三島入道、など、両軍におよんでいる。

もともとこの乱は山名氏の勢力をおさえるための義満の意識的な挑発にはじまるのであるから、義満は重要な位置をしめており、その叙述も詳細である。しかし既にみたように、その政略は「思食子細有けるにや」と曖昧に記して、意図するところの究明を避け、「不儀の反逆」を征伐するという義満の表明に一致する観点から義

満をえがいてゆくのである。義満は、合戦の評定の席では「当家の運と山名一家の運とを天の照覧に任すべし」といい、「上下の大勢揉合て一戦の中に天下の安否を定ばや」といって、「意見まちまちにして、更に一決」しなかった議論を即決させる。また、「今日の軍天下の安否なり。手をおろさでは叶はぬ所と覚ゆるぞ、旗を進めよ」と自から陣頭にたつ姿も描かれ、部下の武勲を賞して「御帶副の御太刀」を与えたり、「弓矢とりの手本」とたたえて「只今の上意の忝なさ」と感激される場面も語られる。細河常久逝去の後には「円頓一乗の妙文を御自書写」して追善供養を行い「貴も賤も一天下の人おしなべて御志の忝なさ」に感じいり、また山名一族滅亡の後にも「あたをば恩を以て報ずべし」と盛大な仏事をいとなむなど、情に厚い名君として叙述される。乱後の政情も

禁裏・仙洞・寺社・禅律・卿上・雲客・諸大名・近習・外様・青侍・格勤の沙汰までも、理非をかたく糺決せられ、賞罰あらたに行はせ給しかば、仁政二ながら立て、国土には恨を含人もなく、諸道には眉をひらく輩のみ多し

と、義満の為政は絶讃されている。これほど作者の立場が明瞭に察知できる軍記は、明徳記以前にはなかったと思われる。

一三七九年失脚した細川氏は一三九一年明徳の乱当時ふたび管領職にかえり咲いていたが、明徳記はこれを「天下悉帰伏して権勢万人の上にたつ」と述べている。ここに管領職再任を細河武蔵入道常久と記していることには疑問がある。史実はその弟頼元が就任しているからで、義満近侍の作者が誤るのは解せないことであるが、後日の検討に委ねたい。この細河氏の行動も屢、記されてはいるが、具体的な展開の叙述はない。



義満方にあつてもっとも華々しい活躍がそがれるのは大内左京権大夫義弘と一色左京大夫詮範で、合戦の場の果敢な行動がくりひろげられている。

装束描写で大寫しにされた一色左京大夫の勇姿は樊噲・張良、三浦の和泉・浅井名にたとえられ、その子一色右馬頭満範とともに激しい戦いの末、山名氏清を押少路大宮で討ち取るのである。

大内義弘はこの乱の八年の後義満に叛きいわる応永の乱で討死するのであるが、ここでは義満方の最先鋒として精根をつくして戦っている。二条大宮の激戦を

西国に名を得たる大内勢と中国にては勇士のきこえある山名方の鬼こめなれば、互に勇進で、只死を限に戦物は有けれども、命を惜て一足も退く物はなかりけり

と述べ、そのなかで「一騎なりとも敵を上へとをしたらんはただこの陣の不覚なるべし。義弘討死せざらん程は一人も通すまじき物を」と叱咤して獅子奮迅の活躍をしめし、山名方の雄、小林義繁と苛烈な立廻りを演ずる。

一方、山名方では、氏清・満幸・義理の行動が、それぞれの配下の武士の行為とともに追跡されてゆく。謀叛の主導的な役割は満幸の言動にみいだされ、「事を武州禅門の恨によせて御合戦候べし」という氏清に対して挙兵を説く言葉から知られるように、かえり咲いた管領細川氏への反抗の契機もふくまれていたとみられる。氏清は討死、満幸は敗北のち丹波路に落ちるが

この謀反を本人に成て思立給しに、諫歎し若党共は数をつくして討死するをみすてて、一かへしも返さず、たださきへとのみいそぎて落行給しありさまは見るしかりし事どもなり

と作者は非難する。さらに伯耆国へ下り、因幡国へ落ちて青屋庄で「剃髪染衣の姿」となり、「応永元年の春の比」(とあるが、史実は応永二年)都に潜行していたところを発見され、誅せられた。ここでも、義満の言葉をとうして「先年内野の合戦之時、奥州とて同く討死したらましかば、跡なき苔の下までも、心にくかるべきに、うき名のある程はながしはてて、所こそおほきに、又都にて討れぬる天罰の程の浅猿さよ」と批判している。三条実冬の「実冬公記」応永二年三月十日の条には満幸の討たれた事情が詳細に記されている。この記によると、もと満幸重恩の郎等で当時京極高詮に降りその家人となっていた多賀某をたのんで満幸は入洛した。多賀は偽って忠誠を誓い、酒をもてなして、満幸が寝所に伏している間に、京極に告げ、その家人らによって討たれた、というのである。その首は六条河原に懸られたという。明德記ではこの劇的な状況は語られず、首の処置も「さらば四条の道場へおくれ」との義満の「仰」によって、四条の聖の手で取納られるということになっている。事実と作者の構想の間に距離のあることが知られる。

義理の場合は、はじめ、氏清の謀反への同心の要請を一度は拒み逆に諫めるという態度にで、説得の結果、参加を決意したということになっており、山名軍の惨敗の後には「今度の都の合戦に打負て、天下の嘲弄に成事は、氏清、満幸が武略のたらざるゆなり」と難じている。紀伊にあってまだ戦闘に加わらぬうちに山名軍は壊滅し、「紀伊国勢も悉権大夫のかたへ降参し」「義理の勢日々に減ずる」という事態となり、再起をはかって舟路をとりゆらの湊に落ちてゆく。このあたりは修辭をこらした道行文で綴られている。由良の興国寺に参って一同ともに出家し、「知識遍散の道人と成て、思

々に行脚」することとなり、ここから流浪遍歴の旅路となって興国寺の縁起や、大神宮の神事などが、義理の進路をたどりながら語られている。

山名方の軍で奮闘する小林上野守義繁は「近年莫大の御恩をわすれて上様へむけ申て弓をひかせ給はん事」と氏清に諫言し、土屋党の大葦平次右衛門尉も「御所様の御扶持を以て人とな」ったその「御恩」を忘れて合戦におよぶ以上は「一家滅亡の時剋」が到来したのだと寄合の席で言明する。その覚悟のうえで、主山名のために生命を賭して戦うのである。

土屋党は百二十七人、(他伝本では五十三人という)「一様に左ゆかけを指て、弓手の長高指を紅のいとにて」結って結束を固め、義満の軍と対戦することになる。

明德記が叙述する武人の行動の主要なありかたをあげてきたが、なお挿話のなかにさまざまな状況下の人物が語られているので、その二、三をとりあげてみたい。

## 七

大方の軍記物語は、その構造上の特徴として、主軸に事件の中心的な経過がたどられ、これに附随して数々の搜話が横にひろがりをみせて展開するかたちをもっている。搜話はそのすみかさねが主軸そのものを形成している場合もあり、また遊離性のつよい独立した一篇の作品をなしている場合もある。

明德記に於いても、いくつかの挿話が織りこまれており、挿話への導入は、一般の状況が語られるのにつづいて、

1、其中にも上原入道と申老武者あり 云々 と分岐して、……世

の人申沙汰しけりとむすぶ形式である。

2、其中に山名小次郎氏義とて……敵も御方もをしなべてほめぬ人こそなかりけれ。

3、其中に殊更哀なりしは家喜九郎が振舞なり……次日討死したりしは哀なりし事どもなり。

4、さてもうたてかりしは先年御所様にめしつかはれける武田下条といふ物あり……行方しらず成しこそうたてかりし事共なれ。

5、又御方の軍勢討死の中に哀なりしは……ゆかりにもあらぬ道行人も皆涙にぞむせびける。

6、又ことさらためしなく哀なりしは……奥州の御台の御事也……ためしなき哀とて、朽せぬ名のみのこりけれ。

7、爰に不思議なりしは武蔵入道の内に三島入道と云物あり……各是を称美して、皆感涙をぞながしける。

以上のように、冒頭と結尾にほぼ共通する型があつて、このなかに、それぞれの人物の行為が語られている。事件の渦中にあつて、あるいは事件の波及によって、どのような運命をたどったかの追求がその内容である。

山名勢の総攻撃に敗れた赤松の軍のひとり上原入道は、逃走の途中相国寺に身をかくそうと門をたたいたが、敵とあやまられて襲われそうになった。そこを逃れて行くうち疲れはてた馬は動けなくなってしまう。都の方にはなお戦いが続いて、遠くときの声の聞えるなかで「これほど臆病にて弓矢のみちに携はる不当さよ」と身を恥じ「此事世には隠有べからず」と案じて、「遁世桑門の身」となったという。戦場の一挿話である。

氏清の猶子山名小次郎は十七歳で氏清とともに討死し「名を万代

の誉にのこし」た。また、山名中務大輔の若党六人は、ともに討死を誓って「神水を吞契約」をしていたが、一人おくれをとった家喜九郎は、あとを追って「赤松勢の真中へかけ入り」ついに討たれる。女房との間には「心安く討死」するよう「髪」をきってとりかわしていたという。

義満から追放されていた武田下条は、自分を頼って降参のなかだちを申出たこじうと塩治信濃守を、生取りと称してその賞に許しを得ようとし、逆に「弥御勘気ふかくなり」出家して「行方しらず成」ったという話がある一方、「討死の忠に依て、一村の安堵」を得ようと出陣し、討死の報が父に告げられた後、覚悟のほどを記した文が届き、歎きのあまり都にのぼって戦場にたおれ伏したという畠山の兵の父の哀話がある。氏清の妻は、わが子が父と死をともしなかったことを叱責し、氏清のあとをおって自害する。細河武蔵入道の配下の三島入道は、同年の故に「主従の礼をわすれて、只朋友」としてうけた厚恩に報いようと、武蔵入道逝去の後、直ちに殉死をとげた。

このような挿話の数々が作品を多彩なものとしてゆくのであるが、関心はもっぱら武士的人間像の如何にそがれ、父母、女房の哀話も同じく武士の悲劇の一コマとしてとらえられている。

戦乱の背後には「京中騒立て、上下足手を空にして資財雑具を持運び、身の隠家をたづねまよふ。洛中変化の有様はたとへんかたもなかりけり」といった状況がありまた、「播州の舎弟山名十郎主従五人、商人のまねをして、美作国へ心ざ」すという記述から察せられるような、商人の行動もあった筈で、かれらは武士社会とどのようなかわりをもっていたかという面にも題材が拡張されていたな

ら、挿話はなお多面的となり、乱の叙述を中心にして生きた社会像の形象が可能となったのではないかと思われる。

挿話的な「不思議の奇端」という童部の触、靈鳥、靈鳩、白鷺の飛行などを吉凶の兆として事件の叙述に介在させているのは、軍記の常套手段であるが、「伊勢の御影向ならせ給て、神戦の奇瑞を顕し給ふ」といい、「都鄙の奇瑞共掌をさすが如くなれば、疑べき所なし。末世とはいかがが申べき」と記して、神道思想によって末世観を克服しているのが注目される。

## 八

多くの軍記物語の成立事情が歴史のなかに埋没して、その究明は假説の域をでいなのに対して、明徳記の場合には、作者の奥書がありこれをてがかりに成立の問題が考察できるという特色がある。しかも、その享受のうえでも、物語僧によって語られたという記録があって、作者・作品・享受の関連がかなり明瞭に把握できるのは、他の作品の場合を推測するのに役立つと思われる。その奥書は一部既にふれたが次のとおりである。

本云

右本為末代記録御合戦ノ後日ニ承及ニ随註之置之処号明徳記諸方ニ書写ノ本在之短才愚慮之上率爾之間詞ノツツキ大方ノ文章余ニ聞惡之間少々所々引直重注置者也此本ノ事人々進退入カトハ私ノ非所成之由方々兼テ存知候者歟併可蒙芳免哉

応永三年五月日 云々

本云

此本以作者自筆本令書写畢雖然定可有誤者也

これによれば、応永三年（一三九六）、乱後五年には、既に「諸方に書写の本」が流布しており、しかも原作を作者自身の手で改訂したテキストが成立していることが明らかとなる。山名満幸が誅せられた応永二年の記事は、この奥書をもつ近衛家藏本（岩波文庫本）以外の伝本には欠いているので（同本富倉徳次郎氏脚註）この改訂の除増補されたものと推測される。富倉徳次郎氏は初稿本の成立を「明德三年夏以降翌年冬迄の間の事」（岩波文庫本解題および「日本戦記文学」と推定されているが、すくなくとも応永二年（乱後四年）以前に初稿が成ったことは確実である。富倉氏が下限を明德四年冬迄としているのは、本文中に満幸の誅を応永元年の春の比」としているのに拠ったのではないかと思われる。

「御合戦ノ後日ニ承及ニ随註之」と述べているように、戦闘に参加した武士たちの武勲談や見聞した話などが素材となったであろう。

軍散て後に宮内少輔御所の御陣へ馳参て、大宮合戦の次第共敵御方の振舞をあらあら語り申されければ 云々  
という叙述などに、その一斑をみいだすことができる。

また、時衆の徒も素材提供の役割をもったと想像できる。戦場を往来して死傷者の処置に従事したことが太平記にもみえているが、明德記の場合も

太刀を杖について「南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏」と念仏申て大宮のかたへしづしづと歩

んでゆく家喜九郎が討れた後「最後まで付たる時衆」が、九郎と女房との間の事情を語ったとあり

の道場より奥州に付申されたりける時衆と宮田の左馬助の使と二人走重て来たり。此物ども二人ながら「奥州御討死」と境

申ければ、云々

という記述もあって、時衆の活動は顕著となるが、宗教上の行動をになうばかりでなく情報伝達などに役かっていたことが知られる。乱後この戦いの回顧とともにこれらの語りはさまざまな次元で行われたであろうと考えられるが、作者は積極的にそれらの話をあつめ、明德記を構想して初稿本の執筆をすすめたのであろう。

既にみたように作者を「義満近侍の者」とする説は承認されるのであるが、身分、素性を明確にするのは困難である。また享受の方法においても、「語りもの」的文体から直ちに物語僧の手に託するための述作とみられるかどうかは疑問であり、書写本として行われたとすることや「詞ツツキ大方ノ文章」を自ら批判して改訂するなど、「読みもの」としての意図が示されているように思われる。作者を物語僧の一員に擬するには、なお当代の物語僧の実態が究明されなければならないであろう。

作品成立の時点での物語僧との関連は不明というほかないが、やがてこれが物語僧の媒介によって広められていったことは確実であり、その一端は看聞御記の次の記録にうかがうことができる。応永二十三年七月三日の条に

先日物語僧又被召語之。山名奥州謀反時部語之。有其興。

とあるのがそれである。ここにいう先日の物語僧とは、同年六月二十八日の記に

大光明寺客僧有物語上手云々。自長老被挙申之間被召之。酒宴御看語之。凡弁説吐玉。言詞散花。聴衆感歎斷腸。相当頭役一座有其興。令自愛。医師同阿参。物語聴聞。入興即退出とある、大光明寺客僧のことであるが、享受の実状をよく示してい

る記事である。

明德記があつた戦乱は、その性格からして太平記の世界の延長であり、太平記のいわゆる第三部にみられる足利方に属して独立性を強めつつあった守護層の幕府に対する離反と帰順の反復が、さらに規模を大きくして再現したかの観がある。謀反をすすめる満幸の詞にも「南朝被官の輩」の同心をあげたり、氏清も「南朝より錦の御旗を申給て今にあり」と述べているなど、足利に叛いては南朝にくみした太平記後半の守護層を思わせるものがある。戦闘の叙述のなかでの煩瑣な装束描写や、形勢が不利になれば忽ち離反してゆく軍兵の動向、武士の行動に対する道義上の批判など、太平記の性格を受継いだ面が多い。一方、文体上では多分に詠嘆性をもった和文脈が復活しており、平家物語の流れをくんでいる。「平家物語のもつ語物としての抒情性と太平記の持つ現実主義的な文学基調との合流」とする富倉氏の評（前掲解題）は首肯できる。しかし語りにおける格調の高さと内容に即して変化する自在な文体という点では

平家物語に及ぶべくもなかった。語りものの詠嘆性はむしろ後の古浄瑠璃に通じるものであって、古浄瑠璃に頻出する常套的な文句が、明德記には屢見出される。とくにそれは挿話的な部分に多く、悲劇とよぶよりは、むしろ惨劇にちかい哀話は、軍記物語の公的な次元から私的な次元での葛藤への転換である。そしてこの方向がやがてより下層の享受者にむかえられる語りもの、古浄瑠璃の発生へと展開してゆくのである。一方、軍記は形象的な表現をはなれて、記録性に重点をおく方向にすすみ数多くの合戦記が残されることとなった。

明德記の位置は、軍記が合戦の記録として文学的な意図を疎外してゆく方向と、より下層の聴衆を対象とする古浄瑠璃的語りものへとわかれてゆく、その分岐点にあって、新しい型の語りものの方向に一步をふみだしたところにあるといえるのではないであろうか。